

## 第七回 諸橋轍次記念 漢字文化理解力検定

## 解答・解説

【問題Ⅰ】(小計44点)

問1【読み書き】①㍯ききょう ②㍯義 ③㍯脳裏(脳裡) ④㍯案

⑤㍯ゆえん ⑥㍯遭遇 ⑦㍯含蓄 ⑧㍯ほうちやく ⑨㍯粗悪

⑩㍯異義 (各2点)

問2【音訓】ウ (2点)

問3【部首】ア (2点)

問4【部首】むじな・むじなへん (2点)

問5【音訓】A イ B カ (各2点)

問6【解字】ウ (2点)

問7【熟語】印象 (2点)

問8【故事成語】ウ (2点)

問9【漢字の意味】エ (2点)

問10【漢字の意味】イ (2点)

問11【人物】エ (2点)

問12【漢字の意義】ア (2点)

■解説 問2 「常用漢字表」が掲げる各字の音訓を拾い上げてみる。

片仮名は音を、平仮名は訓を、「㍿」以下は送り仮名を示す。ア 亜 (ア)・位(イ、くらい)・宇(ウ)・絵(カイ・エ)／イ 圧(アツ)・域(イキ)・羽(ウ、は)・はね・英(エイ)／ウ 愛(アイ)・医(イ)・駅(エキ)・閑(エツ)／エ 哀(アイ、あわれ・あわれむ)・依(イ・エ)・悦(エツ)・円(エン、まるい)。以上により、正解はウ。それぞれの訓「愛しむ、医す、駅、閑する」は「常用漢字表」には採られていない。

突き通すという矛と、どんな武器でも突き通せないという盾(楯)を売り歩く人がいた。ある人が「では、その矛でその盾を突いたらどうなるのか。」と問うたところ、矛と盾を売る人は答えにつまったという故事による。

問9 選択肢の熟語を、それぞれ訓読すると以下のようになる。ア 異論 異なる論(異なる意見、反対の意見)／イ 空論 空なる論(実際の役に立たない理論・議論)／ウ 詳論 詳らかなる論(詳しく論じること、詳しい論説・論文)／エ 無論 論無し(論じる必要のないほど明らかなさま、言うまでもなく)。「勿論」の「勿」は、「…する(こと)勿し…する(こと)勿かれ」と下から上に返って読み、「無論」と同じ構造。「勿論」も「論勿し」と訓読できる。

問10 「彼此」は、あれとこれ、あちらとこちらの意。「長」は、長所、特長。ここでは、「中国の言葉のよいところとわが国の言葉のよいところ」の意。

問11 幕末、將軍徳川慶喜に「漢字御廃止之議」を奉ったのは、前島密。前島密(一八三五～一九一九)は、越後高田藩出身。明治維新後、政府に出仕し、近代郵便制度の創設に尽力した。旧一円切手には彼の肖像が使われていた。早くから国字改良論を唱え、「漢字御廃止之議」はその一環。

問12 諸橋博士は、「漢字漢語談義 漢字は大切にしたい」(『諸橋轍次著作集第九巻』)で次のように述べている。

「ワタクシ」と「watakushi」と「私」と、どちらが画が多いか、筆写に時間がかかるか、こんな例はいくらでもあることです。特にこれが目に映る場合には視覚神経を使う範囲に非常な広狭の差が起こります。地下鉄で「議事堂前」を通るとき、あのローマ字「Gijidomae」を読もうとしても、電車の停留時間中に全部読み了ったことは一度もありません。(塚田勝郎)

問3 「嘗」は形声文字で、旨(意符)＋尚(音符)。「尚」は「当(當)」に通じ、「旨」(うまいもの)に舌を当てる、味わうの意。『大漢和辞典』では「口」の部にある。選択肢の部首は、次のとおり。ア 商：口(くち)／イ 常：巾(はば)／ウ 冠：冫(わかんむり)／エ 旨：日(にち)

問4 「豹」の部首は「豸」(むじな・むじなへん)。同じ部首に「豺(サイ、やまいぬ)、貂(チヨウ、てん)、獾(バク)」などの獣を表す文字がある。

問5 各字の音訓は、次のとおり。ア 蚕(サン、かいこ)／イ 蛾(ガ)／ウ 蚊(ブン、か)／エ 螢(ケイ、ほたる)／オ 虱(シツ、しらみ)／カ 蝶(チヨウ)／キ 蠅(ヨウ、はえ)／ク 虹(コウ、にじ)。「虹」が「虫」の部にあるのは、昔は竜の一種と考えられたため。雄を「虹」、雌を「蜺(ゲイ)」といった。

問6 ウには鼻が長い象の特徴がよく現れている。アは「虎」、イは「馬」、エは「羊」の甲骨文字。

問7 「印象」は、水や鏡に映し出された形の意。現代語の「印象」(対象が心を与える直接の影響)は英語impressionの訳語。

問8 選択肢の語の出典と意味は次のとおり。ア 助長：『孟子』公孫丑上 助けようとして無理に力を加え、かえって害すること。／イ 杞憂：『列子』天瑞 無用の心配。取り越し苦労。／ウ 矛盾：『韓非子』難一 前後のつじつまの合わないこと。自家撞着。／エ 朝三暮四：『列子』黄帝 偽って人をだますこと。どちらにしても大差のないこと。現代人もよく使う「矛盾」は、中国戦国時代の思想家、韓非子の著書『韓非子』から出た語。昔、楚の国に、どんなものでも

【問題Ⅱ】(小計20点)

問1【誤字訂正】①㍯死↓至 ②㍯省↓顧 ③㍯亨↓享 (各2点)

問2【熟語の読み方の分類】①㍯エ ②㍯イ ③㍯ウ (各2点)

問3【故事成語】イ (2点)

問4【四字熟語】ウ (2点)

問5【人物と業績や評価】(1)ア (2)D (完答4点)

■解説 問1 ①「必死」とは、死んでもかまわないという思いで取り組むようす。「必至」は、必ずそういう事態になること。②「省みる」は、「反省」という熟語があるように、自分に悪い点がないか、しっかりと考える場合に使う。「顧みる」は、部首「頁」が頭や顔を表すので、基本的には首を回して見るという意味。③「亨」と「享」は、どちらも音読みでは「こう」または「きよう」と読むので、間違いやすい。「亨」は、名前で「とおる」「あきら」などと読んで使われる漢字。「享」は、「う(ける)」と訓読みする漢字で、「享年」とは「天から受け取った年数」、つまり、亡くなった年齢をいう。

問2 ①ア「素質(そしつ)」は、二文字とも音読み。イ「絵心(えごころ)」は、一文字目が音読み(「かい」はもう一つの音読み)、二文字目が訓読み。ウ「荷車(にぐるま)」は、二文字とも訓読み(「荷」の音読みは「か」)。エ「場面(ばめん)」は、一文字目が訓読み(音読みは「じょう」、二文字目が音読みなので、これが正解。仮名で書くとき一文字になる読み方は、音読みなのか訓読みなのかまぎらわしく感じられることがあるので、注意。②ア「胸座」の読み方は、「むなぐら」。「胸(むな)」は訓読み「むね」が変化したもので、「ぐら」は、座る場所。“存在する場所”という意味のことばなので、「座」の訓読みとして使われることがある。「座(ぐら)」はそれが濁ったもの。イ「魚籠」の読み方は「びく」。「びく」とは、釣った魚を入れる籠“

を指すことばなので、「魚籠」の二文字をまとめて「びく」と読む。「魚」を「び」、「籠」を「く」と読んでいるわけではない。ウ「盆暗」は、音読みの「盆(ぼん)」と、訓読みの「(くら)」に分解できる。もともとは賭けごとの用語で、「盆の上での勝負に暗い」という意味だという。エ「又焼」の読み方は「チャーシュー」。現代中国語でのこの漢字の読み方に由来する、外来語。「又(チャー)」と「焼(シュー)」に分解できる。③ア「掃除(そうじ)」の「除(じ)」は、れっきとした音読み。イ「猛者(もさ)」は、「猛(もう)」が縮まって「も」になり、「者(しゃ)」が変化して「さ」になっているが、一文字目が二文字目に影響を与えているわけではない。ウ「雪隠(せっちん)」は、「雪(せっ)」の「つ」が、「隠(いん)」の「い」に影響を与えた結果、「せっちん」と読まれるようになったもので、これが正解。エ「建立(こんりゅう)」の「立(りゅう)」は、れっきとした音読み。

**問3** イ「天網恢々、疎にして洩らさず」は、天が悪人を罰するためしかけている網は抜け穴だらけのように思われるが、結局は、悪いことをした人は何らかの形で罰を受けることになる、という意味。他のア「一敗地に塗れる」、ウ「木に縁りて魚を求む」、エ「虎の尾を踏む」の説明には、特に誤りはない。

**問4** ア「温故知新」は、昔のことを学んで新しい知見を得るという、「論語」に由来することば。イ「国士無双」は、国中に並ぶものがないほど優れていることを意味する、『史記』に由来することば。正解のウ「軽薄短小」は、一九八一年にヒットした商品の特徴をまとめた、『日経流通新聞』の記事に由来することば。エ「大器晩成」は、スケールの大きなものほど、出来上がるのには時間を要するという、『老子』に由来することば。

**問5** イの藤原佐理(すけまさ)、ウの藤原行成(ゆきなり)、エの小よく見ておくことは当検定の対策となるだけでなく、漢字文化に関する知識を広げ、理解を深めることにつながる。(笹原宏之)

#### 【問題Ⅳ】(小計15点)

**問1【字典】** AⅡサ BⅡコ CⅡイ DⅡキ EⅡク (各2点)

**問2【韻目】** エ (2点)

**問3【部首配列】** ①Ⅱ一 ②Ⅱ亥 (完答3点)

**■解説 問1** 『説文解字』は字の成り立ちを基準として五四〇の部首を立てる。広く用いられた『玉篇』とは宋・陳彭年らが編纂した『大広益会玉篇』。李燾が改編した『説文解字』は『説文解字五音韻譜』で、部首が韻書での登場順に配列し直されている。行均の『龍龕手鏡(鑑)』は主に仏典の難字を集めた字書で、二四二の部首だけでなく、親字までもが声調順に並べられている。韓道昭の『四声篇海』(『五音篇海』とも)は四四四の部首を立てそれらを三十六声母に分類する。親字を筆画数順に並べる最古の字書は金・王太の『増広類玉篇海』(佚)だが、部首字をも筆画数順に並べるのは十七世紀になってから(周家棟『洪武正韻彙編』(一六〇二年)が最古)。「康熙字典」は『字彙』の二一四部首を継承するが、字の部首配置については『字彙』と異なり字の成り立ちを基準にしている。

**問2** 『広韻』(一〇〇八年)は、隋・陸法言の『切韻』の音韻体系を継承しつつ小改変・増補を行っている韻書で、韻目の数は二〇六。宋・丁度らの『集韻』(一〇三九年)も『広韻』と同じく二〇六に分類する。

**問3** 『説文解字』の部首立てには許慎の宇宙観が反映されている。万物の元となる「一」から、十二支の末「亥」で終わるその独特の部

野道風(みちかぜ)は、日本の書道界に大きな足跡を残した人物で、「三跡」と呼ばれる。アの藤原道長は、太政大臣として権勢をほしいままにしたが、書家として高く評価されていない。(円満字二郎)

#### 【問題Ⅲ】(小計15点)

**問1【国字】** (1)Ⅱウ (2)Ⅱイ (各3点)

**問2【国字・異体字】** ツル \*「つる」も可とする (3点)

**問3【国訓】** (1)Ⅱもち (2)Ⅱ画餅 餅搗 柏餅 尻餅 など (各3点)

**■解説 問1** (1)この国字は、室町時代の末に、食品の「こうじ」を表す会意文字として出現した。造字の意図は、「米」でできた「花」が咲いたような状態になったものという。(2)漢字の「麴」(略字は麴)は、形声文字で音はキク、部首の「麥」により麦製の「こうじ」を表した。それに対して、米偏の「糘」を作ること米こうじを表したもの。

**問2** 鳥の名のツル。姓や小地名のほか古文書などに見られる字。漢字の「鶴」の異体字「鸕」から派生した。「田鶴」では「たづ(ず)」となる。

**問3** 「餅」(餅)は、中国では、ほとんどが麦でできた食品のことを指した。一方、日本では古代から専ら糯米(もちごめ)でできた食品「もち」として転用されてきた。熟語の「画餅」は、中国製の熟語だが、そこから日本で「絵に描いた餅」と言うようになったため、「画餅」も正解とする。なお、「銚」は、第四回検定(二〇二一年実施)に出題したとおり、中国製の漢字ではなく国字であり、国訓としては扱われない。なお、この検定のWEBサイトに掲載した過去問を首立ておよび部首配列は、特に「始一終亥」方式と呼ばれる。(田中郁也)

#### 【問題Ⅴ】(小計6点)

**問1【生涯】** ウ (3点)

**問2【業績】** 三聖 (3点)

**■解説 問1** 諸橋轍次は、昭和四十年(一九六五年)に、日本経済新聞で現在まで連載されている「私の履歴書」で取り上げられている。その中で、自身が少年期に入学した奥畑米峰の私塾「静修義塾」の教育内容について(中略)「大丈夫の心構えでおれ」「嘘をいうな」「責任を取れ」「恥を知れ」などの言葉は幾度くりかえされたか知れない。要するにそれが塾の教育の大方針であったのである。考えてみると先生の教えはつねに不言の訓えであった。」「(『諸橋轍次著作集第十巻』)と語っている。

**問2** 『孔子・老子・釈迦「三聖会談」』は、昭和五十七年(一九八二年)、諸橋轍次が数え年百歳にして刊行した最後の著作である。儒教の孔子・道教の老子・仏教の釈迦が一堂に会し、諸橋轍次自身が司会者となって会談を行い、それぞれの哲学を語り合うという、ユニークな空想が描かれている。(諸橋轍次記念館)